

江古田小校長室便り 「温故創新」

H29 (2017)・0908 NO30

校長 伊波喜一

郵便の 便り格別 懐かしき 封を切るのも もどかしくなり

朝晩の気温が20度を切るようになりました。ひところの暑さがずっと前の事に思われます。彼岸も過ぎる頃になると、秋も一段と深まります。いよいよ、読書と手紙（葉書）の季節到来です。父親が筆まめな人で、筆者の学生時代は一週間に一度の割合で、手紙を送ってきました。家族や友人の近況、畑の作物の実り具合が書かれていて、最後は健康に気を付け、事故に合わないようにと締めくくられていました。それに引きかえ、筆者はひと月に一回も返信したかどうか。当時を思い返すと、親心を知らなかったとは言え、随分罰当たりなことをしたなと思います。働き始めるようになってから、葉書（手紙）を書くようになりました。手紙は習慣化することが大切です。ポイントは「あとで」ではなく「今」です。書こうという意欲のある内に、さっと書き上げる。多少、文意が通じないところがあっても、書き上げてしまうことが次へとつながります。筆者は年間、数百枚の葉書を書いています。このやり方が合っているようです。相手の喜ぶ顔を想像して、楽しく書き送っています。